

「贈与」＝交換関係の社会展望としての意味について

青野豊一

要旨

この論文は、トルストイの「人は、何によって生きているか」とモース「贈与論」の読解を導きの糸として、「贈与」＝交換関係の社会展望としての意味について考えたものである。これは、そう遠くない時期に訪れるであろう本格的縮小社会での「贈与経済」への過大な期待が縮小社会研究会でたびたび語られることへの危惧感の表明であり、もっと深く試行することの必要性を訴えているものである。トルストイのこの物語は1881年(53歳)に書かれたトルストイの民話の第一作目であるので、彼の思想が最も濃縮されてでていると思われる。彼は、「贈与」という交換形態(互酬制)の関係を、他者との人格的つながりを通して得られる「社会的な自由」を、崇高なもののみなしていることが感じ取れる。社会状況が悪化しても、この贈与＝交換という交換(経済)形態が機能しておれば、またこの気持ち(慈悲・愛)が多くの人たちの中にシステムとして機能しておれば、金銭的・物質的に今より貧しくても助け合って生きていけると、訴えかけているように思える。トルストイは、このようなことを理想社会形成の基盤として提示している。4章からはモースの「贈与論」の解説と読解を試みている。このモースの文章は、社会展望としてはまったく整理されていないチグハグなものであるが、この中に書かれている熱き思いを拾い出し、意味あるものとなるにはどうあらねばならないのであろうかを思考している。これらの物語の読解を通して、「贈与」という人と物と事の交換関係が未来社会における有効な理念であるのか、縮小社会における社会経済の主導的駆動力とすることができるか否か、その意味と有効性について考えていく一つの機会としたい。

I 問題の所在：トルストイ「人は、何によって生きているか」の読解を通して¹

この物語は、1881年(53歳)に書かれたトルストイの民話の第一作目である。私はこの作品の読解を通して、「贈与」という人と物と事の交換関係が未来社会における有効な理念であるのか、縮小社会における社会経済の主導的駆動力とすることができるか否か、その意味と有効性について考えていく一つの機会としたい。

私は今まで、このような理想理念を語ることを、ともすると批判してきた。でも、今回、この作品の底に横たわっているトルストイの熱き思いに心寄せることも必要であると思直した。

「贈与」は、人間の社会関係の中で、何ものより、武力より強い影響力を持つ。見返りを期待することなく、進んで物と人と事の贈与＝交換を申し出るものである。それも、勝者が、生き残った者がする贈与という行為は、強力である。だから、これに対して無視したり、この行為をバカにした言動をしても、その当事者にとってはそれが負い目としていつまでも心にこびりついてしまう。これを払しょくするには、応えるには、また贈与した人や勢力と同等になるには、自らが返礼としての「贈与」をするしかない。

¹ 以下のトルストイからの引用は、大橋千明訳『トルストイの民話』偕成社文庫による。

さて、この(1)「贈与という交換(互酬制)」という関係の輪が広がることで、(2)「市場での貨幣による商品交換関係」と(3)国家や地方行政による「収奪・再分配という交換関係」に対抗することで、今後の本格的な縮小社会の諸問題に有効に対応することができるようになるのであろうか。今の私たちの生活ではこの贈与に基づく社会関係が弱くなっているのだから、これを再度活性化させることで、このような三つの経済活動のよりよい均衡、対抗のつり合いがとれてくるということは、私も理解するが、・・・。

トルストイの民話のいくつかを読むと、「贈与」という交換(互酬制)関係を、他者との人格的つながりを通して得られる「社会的な自由」²を、崇高なものとみなしていることが感じ取れる。社会状況が悪化しても、この贈与=交換という交換(経済形態)が機能しておれば、またこの気持ち(慈悲・愛)が多くの人たちの中にシステムとして機能しておれば、贈与と返礼という互酬関係による人間関係・社会関係が強く広く浸透しているならば、金銭的・物質的に今より貧しくても助け合って生きていけると、訴えかけているように思える。トルストイは、このようなことを理想社会形成の基盤として提示している。しかし、・・・。

さて、この物語に登場している天使「ミハイル」は、神様の命に背いて地上に落とされている。そこで、三つのことを学ぶように言われる。その三つとは、

①人間の中には何があるのか?

この言葉を私なりに解釈すると、・・・

現実の生活では、社会関係では物質的な欲求や欲望が交錯し、自分の利益が最優先されているかのように思っている人が多い。だが、実は、日々の社会的生活を営む上で最も根源的なものが別にある。人がこれまで社会を形成して生きて来れたのには、経済的利害以外に、地下水脈のように流れているものがある。これを見つけなくてはならない、という意味であろう。

②人間には何が与えられていないのか?

日々の生活の中で、人間には何が決定的に欠落しているのか、何を理解することが難しいのか、何をなしえないのかということであろう。

③人間は何によって生きているのか?

人間は何を支えとして、現在と未来を生きようとしているのか。これなくして明日を生きていくことができないような決定的な事は何であろうか、ということであろう。人は過去からの規定性だけで生きているのではない。未来の姿を思い浮かべるからこそ、未来へと自分を投企するからこそ、今を生きていけるのだ。この明日を生きていくエネルギーの源は何であろうか。

以下の文章中の「愛」や「神」の言葉を「贈与」と「返礼」という互酬関係を意味するものと読み替えていきたい。この贈与と返礼には、物だけではなく、精神的なものや情報等も含まれている。

<あらすじ>

天使の羽をもぎ取られた「ミハイル」は、何物も持たず裸で地上に落とされたが、明日の生活にも困窮している貧しい靴屋に助けられる。そして、服とパンを与えられる。

その時、①のことを学ぶ。ミハイルに与えてしまうと明日のパンがないというのに、それ

² 「社会的な自由」とは、共同体の中で生きるという意味である。

なのに最後のパンを食べさせるという行為を、それを弱者(ミハイル)にするということの体験を通して、人間の中には「慈悲の心・愛」が含まれていることを理解する。物質的損得勘定では割り切れないことが機能していることを、はっきりと認識する。

その後、ミハイルは、この靴屋の弟子として働きだす。そして一年後、金持ちがこの靴屋に注文に来る。生きていることに自信と余裕たっぷりの、そして貧乏な靴屋をバカにしたような態度の男の背後に、昔の仲間である別の天使の姿を見つける。この天使は、この金持ちの寿命が尽きたので魂を抜き取りに来ていたのだ。それなのに、この金持ちはまもなく死ぬのに、そのことに気付いていないことを知る。

そこで、②のことを理解する。人間には、自分の心身にとって何が必要なかを明瞭に知る力が与えられていないことを知る。人間は何時かは死ななければならないのだが、それが、今晚か、明日の朝かもしれない。明日のことが、分かっていない。死の訪れが定かではない日々を生きているのが人間と言う生き物である、ということであろう。つまり、自分のことが、一番分かっていないのだ。だから、自分が生きているこの現時点に今何をしなければならぬかを自明のこととして理解できる力を持っていないことを知る。他人の事や社会的出来事を批判的に話していても、……。自分という「生身の身体を介在」した思考がなかなかできないのが、人間という存在なのだということだ。

そして、六年後、自分が人間界に落とされた原因となった双子の女の子に再会する。その二人の生みの親の魂を抜き取った者が、ミハイル自身であることを思い出す。

子供たちは、隣の人に育てられていた。他人の女が乳を飲ませ、ここまで大きく育ててきたことを知る。この二人の子供を育ててきた女が、この子供たちの今までの境遇を話しながら感極まって泣いている姿を見て、③の「人間は何によって生きているのか?」を理解した。生まれたての子供という決定的な弱者をまったくの他人が育ててきたという行為を知り、ミハイルはこのことを理解した。

そして、これらの三つのことを理解した天使は、天の神のもとに帰ることになって、今までのことを靴屋夫婦に話し出す³。

私には、あらゆる人が自分のことを思いわずらってではなく、愛によって生きているのだ、ということが分かったのです。(＊双子の女の子の)母親には、子供たちが生きていくために何が必要かを知る力が与えられていませんでした。金持ちには、自分自身に何が必要か(＊何をしなくてはならないか)を知る力が与えられていませんでした。……。私が人間だったとき、生きていられたのは、自分で自分のこと(＊損得勘定)を思いめぐらしたからではなく通りがかりの人(＊靴屋)とその妻に愛があつて、私を哀れみ、愛してくれたからです。みなしごたちが生きていられたのは、その子(＊双子の女の子)たちのことを思いめぐらしてくれる(＊口では同情的なことを言いながら、心では損得勘定を計算している)人たちがいたからではなく、他人の女(＊育ての親)の心に愛があつて、その子供たちを哀れみ、愛してくれたからです。すべての人が生きていけるのも、自分で自分のことを思いめぐらしているからでなく、人々の中に愛があるからなのです。

³ 以下の引用では、天使ミハイルが語っている言葉を訳文そのまま記載しているが、数字と下線は私が付けくわえ、＊は私の補足である。

私は前から、神様が人々に生命をお与えになって、人々が生きていくことをお望みになっておられるのを知っていました。今、私は、さらにもう一つのことを悟りました。

私が悟ったこととは、**①**神様は人々がバラバラに生きていくことをお望みになっておられない、だから、**②**一人ひとりの人間に、自分にとって何が必要かをお示しにならなかったのだ、そして神様は**③**人々が心を一つにして生きていくことをお望みになっておられる、だから、すべての人々に、自分にとっても、みんなにとっても何が必要かもお示しになられたのだ、ということです。

今こそ私は悟りました。**④**人々は自分のことを思いわずらって生きているというのは、ただ人にそう思われているだけであって、**⑤**人々は愛によってのみ生きているのです。愛の中にいる人は神のなかにおり、神はその人の中におられます。何故なら、神は愛だからです。

(『トルストイの民話』 pp. 261-262)

こう言って、天使は天に帰っていった。

①は、他の人から離れて孤立しては生きられないことを、社会の中で生きてこそ人間となるということ。人間は、社会的動物なのだから、助け合って生きなくてはならないということであろう。

②は、個々人としては、私たちが社会の中で生きていく上でどうしなければならないかを、明確に自覚できないということ、つまり、人間は自分のことが一番わかっていない生き物であるとの意味であろう。例えば、今後の縮小社会に向けてどうしなければならないかを自明なこととして理解できない、ということである。人は、幻想を見たがる。こうであってほしいという夢を抱きその方向で現状と未来を解釈する傾向が強く、そのため、現時点の現実を直視できないのだ。見たいと思っていることしか、その色眼鏡を通してしか、自分の住んでいる世界を理解できないという致命的欠陥がある。

③は、一個人としてははっきりと理解できなくても、社会総体を知的に理解しようとするれば、この現実社会に「生身の身体を介在」させて諸活動をしていくことに努めると、また、「人間は、過去のある種の富や未来への予感を生き生きと保持している集団の存在に、現実的に、積極的に、かつ自然な形で参加することを通して根をおろす」⁴ことができれば、「自分にとっても、みんなにとっても、今何をしなくてはならないか」がはっきりしてくる。このような意味であろう。

④は、ともすると、今の世は損得勘定だけで人が動いているように思えるが、これは人間社会を表層的に理解しているだけであって、実はそうではないのだ。多くの人、人は経済的利益で行動するのであって、これ以外の行動動機は観念的であり独善的であるとみなしていることが多いが、……。しかし、歴史と時代の中に生きている人を注意深く観察すれば、実は、そうではない。人間の中には、「みんなのために、一人のために」という相互扶助(互酬交換関係)の関係性と心情も、きちんと息づいている。このことがはっきりと意識できないだけなのだ。このような意識が人間の中にあるからこそ、人間社会が今まで維持されてきたのだ、という意味であろう。

⑤は、人間は、お互いに物と人と事の贈与と返礼という交換関係(相互扶助関係)を通して、

⁴ シモーヌ・ヴェイユ著、山崎庸一郎訳『根をもつこと』春秋社。

明日への希望を抱くことができる。トルストイは、この扶助関係のことを宗教的に述べるのであって、隣人愛に満たされた世の中となれば、明日への希望をもって生きていくことができる、と言っているのであろう。

ここに書かれていることは、このような贈与関係の循環を通して、争いを避けて、人は人を信頼でき、希望を抱いて明日を生きていけるという意味であろう。「愛の中にいる人は神のなかにおり、神はその人の中におられます。」という言葉に、トルストイの真意が語られている。彼は、貨幣経済の浸透が増してきたロシアの19世紀末に、このようなことを他の民話でも繰り返し滲(し)み出している。

II 主導的経済形態⁵

私たちは、社会生活をしている。この社会は、先に示した三つの経済関係(1)(2)(3)が組み合わされて成り立ってきた。これまでの歴史的な社会では、この三つのうちのどれかが主導的駆動力となっていて、社会の在り方の大枠を規定してきた。

近現代社会は、(2)「市場での貨幣による商品交換関係」が主導的役割を果たしてきた。人や社会の可能性は、この交換形態のもたらす経済的可能性によって大きく制約されている。日々の生活では、生きていくための諸条件は、金銭での売買を通して獲得していくことが当然のこととされている。私たちの生活の多くは、市場での貨幣による交換を通して組織されていると言ってもよい状況となっている。これは個人だけの事ではなく、家族関係も、そして自治体も国家行政もこの交換関係に適応することが求められている。このような経済関係が人間関係や社会的出来事や、政治的、そして文化的にも、その動機としてみなされている。この交換関係による経済的利害とその要請に適合していくことが、人が生きていく上での唯一の可能な選択であるかのごとくまで言われているのが現実であろう。この交換関係が、人間の運命を掌握しているかのごとき思考がまかり通っている。

このような市場交換関係から今の資本制生産様式が生まれてきたが、それが物と人と事の贈与と返礼という交換関係が主導となる社会へと代わっていくことを、トルストイは心から望んでいたようだ。

このことについて思考する時、大切な事は、中心的役割を果たしてきた交換様式・経済活動が移り変わってきた歴史があるということであろう。この移動によって、社会の在り方が大きく根底的に変化してきたことを、まず理解しなくてはならない。そのためには、現在主導的な「市場での貨幣による商品交換関係」を絶対視することなく、まずは相対化して思考しなくてはならない。

さて、ここで、資本制生産様式と市場経済の違いをはっきりさせなくてはならない。これを私なりに整理すると、市場交換経済は古くからなされているものであり、資本主義経済は近代になって西ヨーロッパから全世界へと広がってきたものである。この経済関係が広まるには、それがなしうる条件づくりを時の国家権力が政策として種々のことをしなくてはならなかった。特に、「労働者」と「土地」、そして「貨幣」等を商品として市場で売買できうるものとしなくてはならなかった。これらは、もともとは売買のために作り出されたも

⁵ この節は、カール・ポランニーの言葉を使って書いている。

のではない。それが、労働市場、農産物市場、不動産市場、金融・資本市場等にて取引されるものとなるには、多くの大変な社会的困苦や動乱を経て形成されたものである。国家による制度的な整備がなくては、市場で需要と供給の法則にしたがうことが最適な事であるとするような幻想がまかり通ることはなかった。つまり、資本主義社会とは、「労働者」と「土地」、そして「貨幣」等をさも商品であるかのごとくみなすという人為的システムである。市場での商品交換が自然発生的に少しずつ広がったものではない。それなのに、市場の自己調整能力を過大に信用して、これが社会を組織する原則(たてまえ・幻想)としているのが、今日の社会の実態であろう。

近代社会において、西ヨーロッパにおいて、(2)「市場での貨幣による商品交換関係」と(3)国家と地方行政による「収奪・再分配という交換関係」が固く結びついた社会システムが出現した。これが、現代社会を覆いつくさんとしている。今世界で進行しているのは、政治と巨大企業との癒着である。グローバリズムの進行で万国の資本家たちは団結しやすい条件にある。食産複合体、医療産業の複合体、軍需産業の複合体、エネルギーやメディアや金融の業界が政府や政治家や官僚等に強力な働きかけをして、政治献金や官僚の天下り先を提供して、社会的な自己防衛としての今までの諸法律を企業にとって有利なように法改正をさせてきた。さらに、このような政策が当然なこととして巨大メディアを通して世論形成がなされてきた。そしてさらに、税金を使って巨大民間企業の損失の補てんをしたり、社会保障費が減額されている。そのため、私たちの生活と労働条件がますます厳しくなっている。

Ⅲ 現代における贈与経済の意味、そして、政治の復権?

トルストイは、互酬原理を重視した生活への回帰の必要性をにじみだしている。また、互酬原理に基づく経済活動の再評価は、現実社会への批判として、多くの人たちが今までも述べてきた。でも、この(1)互酬制という経済的交換原理(平等を重視して自由を規制する交換関係)の悪の側面について述べられていないことが多い。どのような経済活動・交換関係にも、大きな問題があるのだから、この賛美で事を済ませてはいけない。ここにどどまっていたら、どうにもならない。

私は、次のように思う。私たちが作り上げてきた経済活動は三つしかないのだから、別の新しい理想社会のシステムがどこかにあると夢を見るのではなく、この在り方を工夫していくことが、うまく組み合わせていくことが、現実的であろうと思われる。

この互酬制という経済活動には、市場原理に基づく経済活動を対抗させると効果的なのだ。悪に、悪のシステムで、中和・相殺していくしか方策はないであろう。この(2)市場交換関係は平等を犠牲にして自由を重視する経済関係であるから、これと互酬経済形態との中和・相殺をうまく行うしかない。

そしてそれには、(3)政治による「収奪・再分配」の交換関係を強くして、社会的問題を解決していくことが考えられる。現状では、グローバリズムの進展とともに政治の力が相対的に弱まっている。だから、この政治の力を強めていくことで、社会の構造改革をしていくことで、社会防衛としての政策(「収奪・再分配」機能の再整備)を実施していくことが一つ方法として考えられる。

今後の縮小社会は労働の安定性と家族の安定性が激しく揺さぶられ、そして経済の成長がはっきりと破たんしていくのだから、これに対応した新たな公共性のある政策が必要となる。その対策の一つとして、ベーシック・インカムは、持続が可能となる国家的政策・制度設計の一つとなるであろう。しかし、この実現も、現状の国民意識では、なかなか難しいことが予想される。

現状では、この国家による社会福祉政策(収奪・再分配)も、実は、大きな悪(友愛を求めて、国家行政階層序列構造を強化する)につながりかねない。現状では、多くの人々がファシズムにからめとられかねない。これからの縮小していく社会経済では、現在のシステムでは生活はどんどん悪化していくのだから、当然のこととして人は、悪化していく社会では政治の力発揮を求める声が高まるであろう。でも、これだけに頼ってはいは、地獄の循環という事態となる。

だから、善の理想の方策を追い求めるのではなくして、今までに私たち人間が作り出してきた社会経済システムを、問題点を指摘されてきた方策をうまく組み合わせ、それをうまくコントロールできるようにしなくてはならない。人間がこれまでに見出したのは、この三つの経済活動・交換関係に基づく社会しか作り出せていないのだから、・・・これからも、これ以上の社会関係を創造することは難しいであろう。

でも、このコントロールは難しい。この三つのどれが主導の経済形態になっても、これが偏ると、それはとんでもない「縮小社会」になるであろう⁶。

要は、近代になって成立した「国民国家」を前提にした社会構想は、どれもうまくいかないことになると思われる。大きな政治・経済圏を前提にすると、このコントロールは必ず失敗するであろうことが予想される。うまくコントロールするには、人々の自覚性と自主性を引き出すことしかないであろうから、この三つの交換関係のバランスをとるには、狭い範囲の土地と少ない人口を前提とした交換関係でしかできないことになる。つまり、今まで当然のこととしていたことを止めなくてはならないことになる。それは、脱近代の在り方を思考・試行していくことになるようだ。主権国家の解体が必要となるであろう。新たな「中世」の到来か?しかし、主権国家の解体には、国家間対立を防ぐ世界連邦らしきものがないと難しい。現実的には遠い話となる。

IV マルセル・モース(1872-1950年)の贈与論について

1. 山田広昭「マルセル・モースと協同組合運動」(『社会運動』No. 418, 2015年5月)を参考にして⁷

モースは、当時のフランスの協同組合運動に積極的に関わり、そこに現代において忘れられている集団的倫理を再度復活させることに意義をみだしていた。労働者たちのモラルを高めること、社会的意識の新しい可能性を感じ取れるものとして、国家行政に頼る政策で

⁶ では、どうなればよいのか。VII節で私の見解を述べている。

⁷ 山田氏(東京大学総合文化研究所)の見解はゴチック体で示し、その後、私がモース著、森山工訳『贈与論』岩波文庫(原著は1925年刊)から引用している。

はなくして、協同組合運動を考えていた。これは、自由と平等に、新たに「友愛」の意識を喚起することであった⁸。

そのために、古代社会や未開社会に観察された交換＝贈与の倫理を学術研究の枠を踏み越えて、現代にも通用する提案の書の体裁をしている。

人が物を与え、物を返すのは、そこにおいて人がお互いに「敬意」を与えあい、「敬意」を返し合うからである。・・・それはまた、何かを与えることにおいて、人が自分自身を与えているからでもある。そして、人が自分自身を与えるのは、人が自分自身を(自分という人を、そしてまた自分の財を)他の人に「負っている」からなのである。(pp. 294-295)

「未開社会」と書いたが、これは今の私たちから観ての意見である。ひょっとすると、私たちの方こそが、お金のあるなしに深くとらわれた生き方の方こそが、本当の意味で「未開」かもしれない。だから、未開の地というより、強力な国家権力の確立していない地であり、資本主義経済が機能していない社会であり、私たちとは異なった別種の高度な社会システムが機能している社会と言えよう。モースは、「アルカイク(古風・素朴な・たくましい等の意味)」な社会という言葉も使用している。この著作の副題は、「アルカイクな社会における交換の形態と理由」である。

・・・その交換体系は、今からたぶん百年とさかのぼらない最近まで、フランスの農民の間とか、フランス沿岸の漁村とかで行われる交換の体系よりも、おそらくずっと強烈で急迫したリズムで行われる交換の体系である。彼らの経済生活は広い範囲におよんでおり、島々の境界を越え、地域語の境界を越えている。それは一大交易である。彼らの下では、贈り物を与え、贈り物を返すことが、はっきりと売買の体系にとって代わっているのである。(p. 193)

⁸ モースは、ジャン・ジョレス(第一次世界大戦前のフランス社会党の指導者)と深いつながりがあった。「(*ドレフェス事件に関する裁判所の判決後)反ユダヤ主義者やナショナリストの扇動は終息したようだ。・・・フランス社会党も、真の平和のうちに統一への歩みをはじめ、その他の諸政党も再建されつつある。・・・われわれが闘いの相手とすべきは、他のすべての党に先立って、かれらナショナリストでなければならない。・・・社会主義組織にとって、端的に、しかし絶対的に先決を要する諸条件が存在することをみとめないわけにはいかない。すなわち、教権主義、軍国主義、ナショナリズムの一掃されていない地盤のうえには、真にまともな社会主義的宣伝の展開されうる場もないということ、これを心に銘じなければならぬ。高等法院判決が反動側の敗北を公式に確認するものであるからといって、われわれは、反動が死滅したとは露思わない。修道会も、かつてないほど強大である。反ユダヤ主義は、フランスのプチ・ブルジョワジーの経済的・政治的教養となりつつある。社会党が過去の光栄のうちにまどろんでいることはゆるされない。」マルセル・モース「高等法院判決と社会主義者の宣伝活動」1900年、足立和浩ほか編『マルセル・モースの世界』みすず書房(p. 255)。*は私の補足である。

この人たちは、売るという観念も、貸すという観念ももっていないのに、にもかかわらず、売るとか貸すとかというのと同じ機能を有した法的・経済的な諸々のやりとりを行っているのである。(p. 195)

以上から分かるように、人類の中には、比較的豊かであり、勤勉であり、たくさんの剰余物を作り出しているながら、私たちに馴染みのあるものとは異なる形態のもので、また異なる理由によって、多量の物品を交換する術を知っていた、そして、今でも知っている、人々がいるのだ。(p. 196)

この倫理と経済は私たちの諸社会においても依然として恒常的に、言うなれば潜在的に機能していることが認められることだろう。私はまた、ここにおいて見出されたものは人間存在の基底の一つであると考えている。私たちの諸社会もこうした基底の上に建てられているのだ。(p. 63)

修道士のような生活も、シャイロックのような生活も、ともに避ける必要がある。ここに述べている新しい倫理は、おそらくは現実と理想が適切に、バランスよくまじりあうことに存することになるだろう。(p. 406)⁹

幸いなことに、現在でもまだ、すべてのモノが経済の論理に飲み込まれてはいないし感情的価値も機能しているので、

私たちは、アルカイックなものに、基礎的な原理に、部分的にであれ戻ることができる。また、戻らなくてはならない。そうすれば私たちも、生と行動を導くある種の動機を再び見出すことができるだろう。(p. 406)

『贈与論』の中に書かれている「全体的社会事象」には、お互いに矛盾したような複数のシステムが混在している。

「全体的社会事象」とは、法的・倫理的・政治的経済的領域、そして宗教的・美的感性的ことなどを、それらすべての領域や側面が混然一体となって表れてきている社会現象のことである。これは、ポランニーの「社会に埋め込まれた経済」という言葉に通じるものであろう。詳しくは、この節の2にて説明している。

特別な価値をもたない日用品の「取引」としてAとBの交換による等価性は、その場限りのものとして繰り返されている。ここには、取引による当事者間の関係性は、そんなに強固ではない。この関係は、市場経済における開放性に通じるものであろう。しかし、これも貨幣による市場経済とは異なり、交換された物に関係した人たちの関係性をまったく解消することはありえない。

「クラ」として書かれているのは、共同体と共同体の間で存在して機能するものであり、

⁹ シャイロックとは、シェークスピアの『ベニスの商人』に登場する金貸しである。

典型的互酬交換関係であり、これが共同体間の関係における支配・被支配の関係を抑制して同盟関係を作り出すものとして機能していることになる。そして、この関係性は、そのたびに社会関係を設定し直し再強化するものとして機能している。

この間、ホラ貝の音と弁者の口上が、その場の全員に対して引き渡しの儀式的性格を印象付けている。こうした式次第の全体を通じて当事者が追い求めているのは、気前の良さを示すことであり、何からも束縛を受けず自由であるさまを示すことであり、・・・そして自らの偉大さを示すことである。そうであるにもかかわらず、結局のところそこに作用しているのは強制のメカニズムなのだ。それは、物による強制のメカニズムとさえ言えるものなのである。(p. 146)

「ポトラッチ」は、短期的には「譲渡」、一方的贈与とみなされる。しかし、招待された部族や個人もまた、この「ポトラッチ」を行うので返礼をしていることになる。これは、気前よく与えることで他者を圧倒して階層性を創出してしまうことにもなりかねない。でも、これは、このことによってその人の財を使い切ってしまうので、一定以上の巨大な力をもつとはなくなることになる。つまり、適度な権力形成にとどまってしまうことになる。これは、(3)「収奪・再分配という交換関係」に通じるものであるが、それを蕩尽(財を使いつくす)によって防いでいる。この贈与も、このような関係性をそのたびに設定し直し再強化するものとして機能している。モースは、「クラ」はあまり豊かでない地での交換(一種のポトラッチ)であり、ここに取り出している「ポトラッチ」は物質的に豊かな地でのもので、先の発展型・変形型としている。

クラというのは、結局のところ、部族と部族のあいだでなされるポトラッチの一つに過ぎない。(p. 141)

北米インディアンの事例として、次のように書いている。

ここにあっては、消費と破壊は本当に際限がない。ある種のポトラッチの場合には、人は自ら持てる物をすべて消費しなければならず、何も残しておいてはいけない。みんなが競い合ってもっと富裕になろうとし、同時にまたもっとも激的な消費者であろうとするのだ。すべての根底にあるのは敵対と競合の原理である。・・・政治的な地位や、あらゆる類の位階は、「財の戦争」によって獲得される。・・・いくつかの場合においては、与えること、お返しすることはもはやどうでもよく、破壊することが大事となる。・・・そこにおいて莫大な量の富が恒常的に消費され、人の手から手へと移転しているのである。(p. 214)

ポトラッチにおけるこの破壊の慣行には、さらに二つの動機がかかわっている。・・・財の戦争では、・・・一方では、自分の財産を自分で殺し、他人がそれを獲得できないようにする。他方では、他人に財を贈与して、お返しをするように相手を仕向けるか、あるいは相手がお返しきれにないほどの財を贈与することで、この相手の財産を殺すのである。(pp. 219-220)

二つ目は、財を霊に、先祖に引き渡すことである。

このように、私たちから観て、単純には相互扶助としては言い難いものを含めて複数のシステムを組み合わせることで、古代や未開(アルカイックな)社会で互酬関係主導の社会が維持されていることを、モースは示している。これは、ある意味できわめて高度な社会システムであると言えよう。

さらに、彼はこのようなシステムを解明していくことで、信用という観念があらゆる交換には存在していることを指摘している。複合的現象である贈与、とりわけそのもっとも古い形態、つまり全体的給付という形態とモースが言っているのには、必然的に信用という観念をとまなっている¹⁰。

友人や隣人をすべて招いて大規模なポトラッチを行うとき、・・・物をそこで濫費しているだけのように見えたとしても、・・・第一の目的は自らの負債を弁済することである。
(p. 209)

これを大々的儀式で執り行う。

第二の目的は、・・・そうすることで自分自身のため、さらには自分の子供たちのために、・・・ポトラッチの祭宴で贈り物を受け取る人々は、それを貸し付けられたものとして受け取るのであって、・・・何年かの期間がたったのちには、利子をつけて返済をしなくてはならないのである。・・・自分が死んだ時、その子どもたちの生活が安泰あるように保証してくれる手段としてポトラッチを捉えるようになっているのである。(pp. 209-210)

英領植民地のインディアンの経済システムは、文明化された諸民族の経済システムと同じ、信用に立脚している度合いが大きい。・・・こうした取引はそれに保証を与えるため、公の場で行われる。負債を請け負うことと弁済をすること、これがポトラッチである。・・・部族のすべての人々が総体として所有している資産の総量は、現に存在している価値の総量を大幅に上回ることになる。つまり、私たちの社会で一般化しているのと事情は似ているのである。もし私たちが、未払いの負債をすべて一度に相手に弁済してもらおうとすれば、・・・破滅的恐慌が惹き起こされ・・・。(p. 208)

このように、この「信用」ということが、社会の発展によって成立したのではなく、昔から、そして未開(アルカイックな)社会でも存在しているのであって、この贈与=交換関係は私たちの対人関係を基礎づけるものであり、あらゆる経済形態の源であることを指摘している。つまり、(1)「互酬交換関係」が、(2)「市場での貨幣による商品交換関係」と(3)国家や地方行政による「収奪・再分配という交換関係」の基底をなしていることを示している。

さて、まとめると、この贈与=交換関係にはいくつかの原則があることになる。「贈与」しなくてはならない、受け取らなくてはならない、そして「返礼」しなくてはならないとい

¹⁰ 「全体的給付」と「全体的社会事象」については、この節の2で解説している。

う義務的なものと、「気前よく」贈与することである。自分の好意をモノに込めて相手に渡さなくてはならない。しかし、この最後の「気前よく」には、その程度の差が生じて来る。ここから、贈与関係の形態も変容してくる。この「程度の合意」形成は難しく、そのたびに両方の当事者たちの間で、彼らの全存在をかけて獲得しなくてはならないものである。「ポトラッチ」は、この交換のわずらわしさと浪費性を、そして敵対へと向かいかねないという合意形成の危うさを表している。

2. 「全体的給付という形態」と「全体的社会事象」について

このことについての理解がないと、モースの述べていることが理解できないことになるので、再度整理をしたい。

私たちの経済組織や法体系に先立って存在してきたあらゆる経済組織・法体系においては、財や富や生産物が、個人と個人とが交わす取引の中でただ単純に交換されるなどということは、ほとんど一度として認めることができない。(p. 67)

こうした交換は多量にのぼるが、地縁集団も家族集団も、道具その他を交換で得ずとも、別の機会に自前で賄うことができる。したがって、これらの贈り物は、もっと発達した社会における交易や交換と同じ目的に資するわけでない。目的はまずもって倫理的なものである。それが目指しているのは、当事者である二人の人物の間に友好的な感情を生み出すことになるのだ。・・・誰一人として、贈られたプレゼントを拒むことはできない。(p. 133)

第一に、お互いに義務を負い、交換を行い、契約を交わすのは、個人ではなく集団である。・・・第二に、これらの集団が交換するのは財や富だけではない。動産や不動産、経済的に有用性のあるものだけではないのである。交換されるのはなによりも、礼儀作法にかなった振る舞いであり、饗宴であり、儀礼であり、軍務であり、女性であり、子供であり、踊りであり、祝祭であり、祭市である。もちろん祭市では物が取引されるし、富が循環するのだけれども、それは契約のさまざまな契機や要素の一つに過ぎないのであって、契約それ自体はそれよりもはるかに一般的であり、はるかに恒常的なのだ。そして最後に、これらの給付と反対給付は、贈り物やプレゼントという、どちらかと言えば自発的なかたちで行われるのだが、それにもかかわらずそれは、実際のところまったく義務によってなされている。この義務を果たし損なえば、私的な戦争もしくは公式の戦争となったほどである。・・・私は以上のすべてを、全体的給付の体系と呼ぶことを提案した。(pp. 67-70)

ここでの義務とは、規範に基づいた法的なものとして理解しなくてはならない。このような義務的行為によって、部族間の和解・相互理解が成立するとされてきた慣習である。だから、「義務」を現代的な意味で理解してはならないようだ。倫理的な目的のために、仲良くなるための義務＝自発的と理解しなくてはならない。これは、この体系の持つ拘束力を表している言葉である。別の言い方をすれば、モノのやりとりは、それを行っている人と集団の全存在のやりとりであり、生きることの意味の根幹に触れているものであろう。

物質的生と精神的生、そして交換が、そこにおいては我欲を超えたものとして、かつ義務として、機能している。それに加えて、この義務というのが神話的で想像的な仕方では表現されている。(p. 197)

しかし、それは「これらの給付がいわば自発的であり、見た目には自由で見返りを求めない給付としてなされているにもかかわらず、それがじつは強制力にもとづき、利害関心にもとづいてなされているということである。」(p. 60)と、みなすこともできる経済形態でもある。

私が論述してきたさまざまな経済行為の、そのすべてを鼓吹しているのは、ここでもまた一つの複合的観念である。・・・純粹で自発的で、純粹に見返りを求めない給付という観念ではなく、また、純粹な損得勘定に基づいた有用物の交換という観念でもないからである。・・・これらが混じり合った一種の混合物なのだ。(p. 418)

この贈与関係は自由で非打算的でありながら、実は拘束的で打算そのものなのだ。そして、次のように述べている。

私たちがこれまで使ってきたさまざまな語彙は、・・・それ自体としてはさほど正確なものではない。・・・自由に対する義務とか、寛大さ、気前の良さ、奢侈に対する儉約、利得、有用性とか、私たちはこうした諸概念をともかく対立し合うものとして捉えがちであるけれど、法と経済にかかわるこれらの概念をこのあたりで見直すのがよいのではないだろうか。(p. 418)

そして、モースはまとめとして、次のように書いている。

全体的社会事象としてのこのシステムは、「社会の全体を活性化させ、あらゆる社会制度からなる全体を活性化させるということだ。」(p. 437)

これらの現象はすべて、法的現象であると同時に経済的現象であり、宗教的現象であり、さらにはまた審美的要素をもつ現象であり、社会形態にかかわる現象であり、等々である。(p. 438)

この全体的給付の体系は、私たちが現に確認しうる限りで、そしてまた私たちが想像しうる限りで、最も古い経済・法体系をなしている。これが基礎となって、その下地の上に交換＝贈与の倫理が浮き彫りになってきたのである。そしてこの体系こそ、その規模に違いがあるとはいえ、私たちの諸社会がこちらの方向に進んで欲しいと私が思えるような経済・法体系と、まったくもって同じタイプの体系なのである。(p. 409)

モースがこの中で明らかにしたことは、

- ・アルカイックな社会では、交換関係は互酬的贈与の形態で行われている。
- ・この互酬交換関係は現代社会よりはるかに重要な役割をしており、モノの交換とは人間の

全存在のやりとりであり、友愛の関係を築くものである。

・この交換関係は経済的関係にとどまらず、法的・宗教的・情緒的・審美的意味を持っている。この三点であろう。

結局のところ、それは混ざり合いなのだ。物に靈魂を混ぜ合わせ、靈魂に物を混ぜ合わせたのだ。さまざまな生を混ぜ合わせ、そうすると、混ぜ合わされるべき人や物は、その一つひとつがそれぞれの領分の外に出て、お互いに混ざり合うのだ。それこそがまさしく契約であり交換なのである。(p. 136)

V モースの「贈与論」についての私の意見

以上でモースの贈与論の説明を終えるが、私は彼の説をそんなには評価しない。贈り物を循環させるという贈与のシステムは、その社会にかかわる個人と諸集団が対立的関係になることなく、殺し合うことなく向かい合うという社会関係であるとされていて、これが彼の生きていた20世紀の初めの社会には、近代に急速に広がった資本主義経済には欠落していると指摘して、その贈与経済の有効性を説いている。しかし、……。私としては、モースほど評価していない。

互酬交換関係が主導的役割を果たしている経済活動では、自由意志で贈与するのではなく、支配・被支配の関係を作り出さない交換関係として、義務として贈与しなければならないことになる。いやでも受け取らなくてはならず、さらに必ず返礼としての贈与をしなくてはならないものとして機能している。そして、これにより同盟関係や協同関係、そして法的とも言い得る社会的関係性をもつことになる。この贈与関係を通して、対立・衝突を平和状態へと導くものである。つまり、このシステムは、平和、そして平等を重視したものであるが……。

しかし、実はこのような社会はそんなに平等ではない。首長とその配下の者たちと一般の人たちという区分はあるし、首長たちは世襲であることが多い。まあ、今日的な強力な国家権力が成立していない、よりゆるやかな関係性の社会であろう。

ここまでのまとめから分かるように、このような贈与＝交換では、これに関わる人たちの生きていく上での全存在が活性化され熱く関係している。このように、個々人の意識がこの社会システムにきわめて強く拘束されている人間をモースは「全体的存在者」と言い、贈与関係にある社会の中で人が安定的に位置づけられていることを示している。つまりは、アルカイックな社会で誕生する者は、生まれる以前からかなりの部分があらかじめ決定されており、個々人の特性・個性、個々人の努力より、与えられている地位・立場の役を演じることが最大限大切な事とされているのだ。そして、これらをしかたなく演じるのではなく、きわめて能動的に社会参加をしている。社会の拘束性が自主性のごとく様子を示し、そのことによってこの社会秩序が再確認・再強化されているという関係性であろう。

こう理解すると、このような贈与関係(互酬交換関係)の現代的意義を理解しても、このような社会関係では、個々人の自由な創造的関係が委縮してしまい、とんでもない不自由な社会となりかねない。今の私たちから観て、とても受け入れがたいように思える。特に、「個人的自由」、そして「匿名の自由」は大きく制限されるであろうことが予想される。贈られ

た者は必死になってその返済をする。つまり、束縛が強く表れて来る関係性である。このような関係性が主導している社会では、自己確立に向けて苦闘する近代的個人の成立する余地はない。

この経済活動は、自由より平等を！そして、支配・被支配関係を拒否して、協同の硬い絆を作り出すが……。このような互酬交換関係の単純賛美は、大きな問題である。特に、この贈与関係が呪術的・感情的な要素を含んだ義務として意識されては……。未来社会にこの交換関係が主導となることに賛意は難しいし、そうはならないであろうことが予想される。

さて、このようなアルカイクな社会の関係性は、私たちとは全く異なっていると言えるが、そんなに遠くはない。このシステムは私たちのすぐ近くに、日々の生活の中に潜んでいるが、社会総体としては私たちとは大きくズレているパラレルな世界である。パラレルワールドとは、私たちの世界と昔のある時期までは共通していたのが、その後ズレしまい、もう交わることのない別の世界のことである。実は、このようなズレている世界、社会関係、社会意識は私たちの近くにもある。例えば、田舎の社会と都会生活者の間にあるズレである。同じ空間、同じ時間を過ごしていても、贈与＝交換関係に対する量的・質的な差異がある。私などは、何を返礼しようかとすぐ考えてしまうのだが、都市生活者たちはそうではないようだ。そのため、田舎暮らしにとっぷりと浸っている人は、都市生活者への拒否反応を示すことがよくある。田舎の人と都市生活者との間で、人の行き来はあっても……。以前に比べてこの田舎の地も、都会風の間人関係になってきていることは確かな事であるが、それでも、まだまだ日々過ごしている世界(観)は大きく異なっている。社会的流動性の少ない田舎では、今も贈与と返礼の関係は都市生活者に比べて今も濃厚に存在している。この関係を通して自分の存在が他の人たちとの関係で成り立っていることを嫌でも感じる。モースの言うような「全体的人間」という熱い関係性ではないが、嫌な人とも無関係ではいられない状況で生活している。そのため、空気まで湿っている。欲と打算と無欲と善意の入り混じった重たい社会関係である。そして、これは、私の若いころのいくつかの可能性を押しつぶしてきたものである。しかし、現代の都市生活者の中には、このような関係性にあこがれる人たちがいる。理想社会に近いとして田舎の相互扶助の習慣を賛美したり、贈与経済に熱い思いを抱く人たちがいる。「市場での貨幣による商品交換関係」によるパサパサとした空気の中で生活していると、このように思うらしい。田舎の昔には、相互扶助の習慣が都会に比べてたっぷりとあったことは事実である。でも、この裏には、どぎつい「田舎の毒」がへばりついていることを忘れてはならない¹¹。

モースのこの著作では、アルカイクな社会と現代社会との関係づけがきちんとなされていまいと言えよう。そのため、社会展望としては、はなはだ不十分なものとなっている、と言える。このままでは、トルストイの夢も役に立たない代物となる。

VI 「贈与」＝交換関係に社会展望はあるのか？ トルストイの宗教、モースの「贈与経済」

¹¹ 昨今では、商品経済の浸透につれて相互扶助の関係性が希薄になり毒性も少しずつ、そして急速に弱まってきているが、……。この都会の人たちへの反感・拒否感には、都会への劣等感とひがみ意識も含まれている。都会風の生活にあこがれても、そうはならない現実がある。そのため、ますます田舎の毒という因習にへばりつく人たちもいる。

の有効性?

現代において、これがよりよい経済活動として実現されるには、自らの自由意志として行われる時だけであろう。この意識が人間の内部に、心の内に、当然のこととして義務として思われるようになるには、どのような社会システムであろうか。私が先に述べた主権国家の解体、新たな「中世社会」の到来によってか?

トルストイが「愛の中にいる人は神のなかにおり、神はその人の中におられます」と述べていることは、神の国はこの世とは異なる彼岸にあるのではなくして、現実のこの世に存在していなくてはならない。神の国は終末によって到来するのではなく、すでに到来している。神の意志は突然の終末で示されるのではなくして、具体的歴史的過程を通して示されるとの意味であろう。つまり、彼は社会的であり政治的思想家とも言えるであろう。だから、彼の説いている宗教を、未来社会を建設しようとする新しい社会思想として解釈することができよう。

悲惨な生活の到来となった縮小社会での貧しさの中で、「愛」と「慈悲」にあふれる思想が広く深く展開するのかもしれない。トルストイの宗教は、既成のロシア正教そのものではないようだ。彼は、1901年73歳の時、ロシア正教会から破門されている。だから、既成の宗教思想をイメージして批判してしまうことはできないであろう。

モースは贈与の倫理性が社会に広まることを期待した。しかし、「全体的給付の体系」のような社会に戻ることはできないであろう。アルカイックな社会における人間関係は、このような交換関係を通して熱くべとべとに固まっている。社会倫理が所属している個々人に深く浸透しているのが、「全体的社会事象」と言われているものである。

それに比べて、私たちの今の世界は、自分の存在が他の人たちの存在に負っているという意識は遠く薄くなっている。だからと言って、贈与＝交換関係が主導の社会関係をこの私たちが生活している世界に再度求めても、……。こう考えると、モースの『贈与論』で述べていることは、社会構想としての有効性はあまり高くない。

このようなことを記載したモースの意識は、実は覚めている。アルカイックな社会のように熱くない。(2)「市場での貨幣による商品交換関係」主導の社会に生きているのだから、それは当然であろう。彼は、贈与＝交換による逃れられない社会的拘束の中で生きているのではない。それなのに、彼はこのような関係性を自らの意志で選択する人間像を想定して語っている。ここに、モースの社会構想には、大きな問題がある。現代人は、特に都市生活者の社会認識は、アルカイックな社会とは遠く離れている。贈与＝交換という経済形態はその変型の程度によってだんだんと弱くなり、交換の場での全存在をかけるということも、時間的遅延化により大きく薄まってくる。その場での存在をかけた贈与という深刻さ、切実さも、……。そして、現代がある。今の私たちから観て、この本に書かれているような贈与関係は、そのままでは煩わしく危険なものであろう。先にも書いたが、モースの論は、現代社会との関係性がきちんと整理されていないのだ。夢と希望が混交している。

彼はアルカイックな社会については、次のようにも書いている。「私が記述してきた社会は、……すべて分節社会である。」(p. 445)¹²

¹² この「分節社会」については、森山工氏の訳注を以下に引用する。

モースは、さらに次のように書いている。

依然として社会はクラン(氏族)を基盤として形成されていた。そうでなくとも、少なくとも大家族を基盤として形成されていて、そうした大家族は程度の違いこそあれ、内部においては未分化であり、外部に対しては相互に独立していた。(p. 445)

つまりは、強力な国家権力が形成されていない社会なのだ。それに対して、私たちの住んでいる社会は、同型ではない複数の集団に役割分担と階層化されて、それらが相互依存するかたちで構成されている。先の機械的連帯ではなくして、有機的連帯と言い得るものによって社会が統合されている。モースはこのように現代社会との大きな相違点を述べながら、それなのにアルカイックな社会における社会システムに過剰な期待を寄せている。

ここまで批判をしてきたが、逆説的ではあるが、だからこそ、彼の主張はそれなりの意味はある。(2)「市場での貨幣による商品交換関係」主導の私たちの社会には多くの問題があるからこそ、モースの指摘は意味あるものであろう。多くの人間の日々の生活から大きくかけ離れてしまい悪の要素ばかり目立ってきた現状の社会経済から、私たち人間が本来持つべき全体性(私たちの存在は、他の人たちとの関係によって活かされていることを日々体感できる=これこそが生きる意味)を再度回復しようとした視線は、大変意味あるものであろう。彼は、現代においてもモノは市場価値以外の価値も持っていることに注目している。私たちの生活が(2)「市場での貨幣による商品交換形態」そのものになってしまうことがないことを知っていた。これは、トルストイも同様であろう。ここに、意味がある。

さて、私たちは、ある領域では、ある地域では、ある人たちとは、今も部分的贈与関係にある。これが、社会全体とはどの程度関係しているのであろうか。社会からの拘束力は、個々の人間には同じようには表れていない。個々人の行為が社会全体とつながっているという意識を取り戻すには、どのようにしたらよいのであろうか。この贈与=交換関係を私たちがより意識的に多用することで、本格的縮小社会では私たちの暮らしはなりたつのであろうか。

Ⅶ 三つの交換関係構造改革を通して、世界観・価値観の転換を!

まず、最初に述べた三つの経済形態の「コントロール」ということや「バランス」についての問題を述べたい。人為の思想による社会のコントロールは難しく、多くの悲惨な社会問題を招いてきた歴史を知らなくてはならない。ルソーやプルードンの言葉を思い出すまでもなく、モースの言っているようなバランスよくまじりあうことは、大変難しい事であろう。私たちには「美しいことを夢見て、醜いことをした」歴史がある。だから、多くの人々が自覚的人間となるなんてことを想定した壮大なロマン的思想に留まってはならない。繰り返

「ゴカイ、ミミズ、ヒルなど、一般に細長い円筒形で、前後に連なるほぼ同じ構造をもった多数の環節からなる生物がイメージされている。デュルケームの社会類型論において、分節社会は複数の同型集団が並置されて結合することによって成り立つ機械的連帯を特徴とするものとして概念化されている。」(p.466)

し言うが、単純さ・わかりやすさを求める社会思想に振り回されてはならない。その時の雑多な社会関係を含んでいる複合的社会システムを、私たちは見出さなくてはならない。

さて、ここまで論を進めて来たのだから、私たちは今後どうしなくてはならないかをはっきりしなくてはならない。今後の本格的縮小社会に向けて、私たちがなすべきことは、贈与＝交換関係を私たちがより意識的に多用することに夢を託することに留まることではないであろう。今の社会システムが崩壊した時、あるいは、より豊かな人間関係を築こうとして個人的に贈与＝交換関係を盛んに行うことは、大いに歓迎すべきことである。このようなことは、私もたくさんしていきたいものである。しかし、これは個人的思いである。未来社会展望ではない。このままでは、多くの人たちが理性的・意識的・自覚的に生きることを夢見ているロマン的夢物語そのものである。ここから次に行かなくてはならない。ロマンにひたっているではない。モースの物語にも、夢と現実との揺れる心が表れている。ある時は熱く思いを抱き、ある時は冷静に現実社会を観ている。

真の革新、偉大で称賛に値する革新によって、もはや時代に合わなくなった倫理段階を乗り越え、贈与経済を乗り越えて先に進んだのはローマ人とギリシャ人なのだ。贈与経済というのは、あまりにも運任せで安定性が無く、あまりにも高くついて無駄が多いから、贈与経済というのは、人対人のさまざまな思惑で満ち満ちていて、市場・経済・生産の発達とは両立しえず、つまるところ当時であっては反経済的となっていたから。 (p. 336)

このようなことまで述べている。そして、覚めた意識で現代的課題として、

私の考えるところでは、・・・市民があまりに善良であり自覚的であるなどと期待してはならないし、逆に市民があまりに他に無関心で現実主義的であるなどと決めつけてもならない。必要なのは、市民が自分自身について敏感な感覚をもつこと、そしてそれと同時に他者についての、社会的現実についての、敏感な感覚をもつことである。(p. 408)

何が善で何が幸福かをはるか遠くまで探しに行く必要はない。平和として定立されたものがある。労働として(ある時は集団で行う労働として、ある時には一人で行う労働として)適切に秩序づけられたものがある。富として蓄積され、次いで再分配されたものがある。お互いに尊重し合い、お互いに寛容になり合うこととして教育が教え物がある。善も幸福も、そこにあるのだ。(p. 452)

と、まで言っている。

これは自主的＝強制的に社会参加をして、それが体感できる未来社会となることを述べたものであろう。義務＝自発的なものとなる社会システムとして、自分と他者への敏感さを獲得してそれを維持できる複合的社会システムとして、モースはアルカイックな社会における贈与＝交換システムを一つのモデルとして提示し、現代社会においても「全体的人間」へと近づける方策を求めているのであろう。これは、先に述べた「義務」観に集約されて示されている。義務とは規範に基づいた法的なものであり、仲良くなるための義務＝自発的なものであった。自分の利益に執着すること、自分の利益にこだわらずに無私無欲であること、

この二つの意識が混然一体となって富の循環をもたらしているというシステムに、モースは期待し夢を抱いた。私はこの視線を評価したいが、このままではとても、……。この視線をもっと前に進めて思考しなくてはならない。

私たちは、今、砂粒のようにバラバラになっている感覚で生きている。ともすると、家族さえも……。しかし、モースの言っているように、都市生活者も完全なバラバラ状態にはならないであろうが、……。それでも、これまででは考えられないような家族関係となっていくことを覚悟しなくてはならないであろう。

砂も水分を含んで人為的に固めると、丸くなる。人間社会におけるこの水と人為とは何であろうか。モースの描いた贈与＝交換関係が主導の社会では、例えると、ベトベトとしている糊である。そうなると、現代社会で砂を一時的に固める水分の働きをしているのは、現代の人々を集めて関係性を形成しているのは市場における金銭による商品交換関係となる。しかし、部分的ではあるが、互酬関係も存在している。ここに、一つの可能性を見出し贈与＝交換関係へと希望を託する人たちが繰り返し出現するであろう。しかし、私は言いたい。「贈与経済」にあこがれても、それが社会全体を主導するようなシステムはなかなか実現しないし、贈与＝交換関係の問題性をきちんと認識しなくてはならない。その上で、この夢を徹底して語ろうではないか、と。

まずは、国家的レベルでは、現状の資本主義経済への規制を国家行政が強めていかななくてはならないし、政治の在り方やその組織の在り方を改革していかななくてはならない。しかし、ここでは、「現状の国家や社会全体のことを考慮しなくてはならない」等という言い方で、痛みを伴う変化を望まない人たちの意見に沿った結果となかねない現実**にぶつかる**ことが予想される。そのため、さらに**いっそう複雑極まりない制度を作り出して官僚機構を強化させる結果となりかねないが、**……。それでも、私たちはなすべきことをしなくてはならない。

贈与＝交換関係が大きく意味を持つ社会となるには、モースは、「こういった諸々の動因・要因の全体が社会というものを基礎づけており、また共同生活というものを構成している。したがって、これらの諸動因・諸要因を意識して統制していくということが究極の技法なのだ。」(p. 453)と言っているが、そうではないであろう。

最初に示した三つの交換形態を組み合わせうまくバランスよくコントロールするというよりも、繰り返しこの三つの交換関係の在り方を変容していくことがまず必要な事であろう。私は、バランスよく統制するのではないと考えている。人が行うこのような統制は必ず失敗して、とんでもない社会を形成してしまいかねないであろう。

資本制経済の在り方の構造改革をしたり、国家行政の在り方を変えていくことで、一つ一つの仕組みを変容させていくことで、この三者関係をも変更させていくことが大切なことであろうと思う。私たちを取り巻く三つの交換形態が、今とは量的に、そして質的にも異なる関係性へと変容しなくてはならないであろう。まずは、収奪・再分配をする行政の在り方の改革、そして、市場での貨幣による商品交換の在り方の改革をしなくてはならない。そうになった時、贈与＝交換のその内容も変容し、それなりの意味のあるものとなるであろう。そう、モースの言う「全体的社会事象」のように混然一体となって、……。そして、それらの改革を通して世界観・価値観の変革が伴うであろうことが予想される。

未来の縮小社会では、生産・消費協同組合や共済組合等が社会を牽引していくことができるようになり、社会の各分野や領域に、多様な自主的協同組織が組織されれば、……。それらによって、個々人の自由も発揮できる社会となれるかもしれない。その時、「贈与」という交換（互酬制）形態が、モーアの願いに近づくことができるかもしれない。

そして、私たちがなすべきことは、もう一つある。国家的レベルではない狭い範囲の地域レベルで目に見える具体的改革を実践していくことである。社会経済が衰退しても、身近な関係で贈与＝交換関係を盛んに行うことである。でも、各地域にはそれなりの毒があり、一筋縄では事が運ばないことか予想される。そこで、まず、心通う友人・知人等の小さな協力的なグループで、……。このことは社会展望として先に否定したが、生活防衛としては、このような狭い範囲の関係性は意味があるであろう。今より濃いしつとりとした人間関係に嫌気がさしても、贈与されて負い目を感じても、市場経済も機能しているのだから、贈与＝交換関係のマイナス面を相殺できうと思われる。このような取り組みの中から、友人の友人、知人の知人へと、普段会話することもない人たちを含めた個人的関係を越えた関係性を周囲の人たちに広げていける場の設定の工夫を焦らずに試行錯誤することが大切であると思われる。

しかし、このようなことは、やはり一人ではできない。周囲の人々に、経済成長という夢から目覚めることを、エネルギーの問題で社会経済の縮小は必然である事等を事あるごとに、働きかけなくてはならない。ここ数年で、「縮小社会」という言葉への反発は、大きく減少している。確実に、人々の意識は変わってきている。だから、今こそ、別の夢を語りかけなくてはならない。この今とは異なる未来社会の夢が語られないと、多くの人たちがファシズムへと流れて醜悪な喜劇を繰り返されてしまう。そのためには、私たちは、もっと覚めなくてはならない。ここに、現代社会を批判する一つの夢物語(理想)として互酬制(性)経済を活用した社会へという大きな旗(未来像)を掲げることは、意味があるであろう。

だとすれば、もう一度言いたい。人は居屈だけでは思考が喚起されないし動かないのだ。物語性のある未来像が指し示されたとき、その言説空間の中に自分が位置づけられた時、問題を自分のこととするのだ。だからまず、

①意識ある人たちの問題意識を自己物語として語らなくてはならない。小難しい論文では人の心には届かない。

②また、贈与＝交換関係の夢の旗をペン先から大きく広く高く掲げようではないか。ベーシック・インカムも、一つの夢なのだ。友愛の意識を涵養するものとして、それなりの意味がある。このことについてのいくつかの問題があるにしても……。そして、地域経済における贈与＝交換関係の夢を語ろうではないか！ 例えば、

- ・とんでもない最悪の未来社会像と、
- ・縮小社会となっても十分暮らしが成り立つことを、
- ・そして、その縮小社会が素晴らしい社会となりうる可能性を、

物語として、私たちは、「生身の身体を介在」させた語りを文章化しなくてはならない。

さて、先にモーアの贈与論によって整理したアルカイックな社会がある種の高度な社会システムであるとしたが、これから本格的に到来する縮小社会においても、さまざまな工夫をこらした高度な複合的(複雑ではない)な社会システムにしなくてはならないであろう。これは、間違いないことである。単純さ・分かりやすさという言葉に騙されてはならない。

現状の制度を次々と改正(複雑に)して運用する官僚機構を強化するのではなく、私たちが自主的にしていくことに努めなくては、・・・。

VIII おわりに

モースの『贈与論』は第一次世界大戦という愚かな行為への深い反省¹³に基づくものであり、ポランニーの著作は第二次世界大戦への反省であると言っている人がいたが、今後、経済成長という幻想を追い求めてエネルギーの奪い合いの果てに第三次世界大戦が起こるかもしれない。その時は、人類絶滅の危機をはらんだものとなるのは必定である。

社会は、ますます煮詰まってきた。アメリカに、あのような大統領が登場するのは、・・・。生活苦や痛みや苦しみを抱えている人たちが増えているのに政治が具体的解決策を提示できない時、人々を煽り立てて社会内のある少数派への攻撃をする政治家が登場する。このような歴史を、私たちはもうすでに経験しているはずなのに、・・・。

悲劇の歴史を繰り返さないために、私たちは、「生身の身体を介在」させた諸活動を通して、今、何をしなくてはならないのかを考えなくてはならない。

独り言・・・快適な生活?・・・

今日(8/26)、朝の4時に目覚める。外は、まだ暗い。そこで、畳の上で、まどろむことにした。布団の上は、暑いのだ。

布団の上では、私の代わりに、猫と犬が横になっている。朝がひんやりしだしたので、猫はかけ布団の上で丸くなって寝ている。犬は、私の枕に頭をのせて、人間のように横になっている。このようになってしまったのは、何時からだろう。我が家に猫が来てからだろう。犬は猫のしていることが気になり、同じことをする。そうしないと人間からの愛を得られないと思っているらしい。犬は猫が夜中に私の布団に来るのまでは一人離れて寝ているのに、音もたてずにこっそりと猫が来ると、すぐ布団の上に来る。困ったものである。しかし、まあ、なんと、微笑ましい生活であろうか。この二匹は、我が家の家族となっている。

起きたのは、5時を少し回っていた。それから着替えて外に出て、息子の嫁に送る農産物の箱詰めをした。それが終わると、今日の農作業に必要なものを、軽トラックに積み込む。そして、田の様子を見に行く。稲の穂が出てきたので、猪が活発に動き出している。先日、真昼に稲穂の垂れた田の近くで少し大きくなった瓜坊が2匹、昨日は親と小さな猪が道路の真ん中でいた。クラクションを鳴らそうかと思ったが、突進して来られると車が傷むので、お通りになるまで、静かに待つことにした。

6時半前に食事を終えて、今日働かなくてはならない田んぼに行く。今日も、朝から暑い。いや、暑いというより、蒸すのだ。湿度100%の蒸風呂の中で仕事をしているようだ。曇っているので太陽が出ていないのに、少し動くだけで大粒の汗が額から「ぼとぼと」と落ちて来る。服は、すぐびちょびちょになる。午前中にしなくてはならないことが、田に行くと、次々と思い浮かぶ。

¹³ モースと深いつながりのあったジャン・ジョレスは、1914年国粋主義者に暗殺されている。

でも、急いでしないことにした。休み休み、ぼちぼちすることにした。今年の8月10日に、私の農作業の方針を変更したのだ。年齢65を過ぎると、年々体力が目に見えて落ちて来ると人から聞いている。もう、無理をしないことにした。そして、一週間に一日は、必ず休みの日を作ることにした。そして、休日は、家から出ることにした。家に居たり田に行くと、どうしてもしなくてはならないことが見えてしまう。そうすると、またまた動いてしまう。だから、本と水筒を持って出ていくことにした。でも、90歳を越す母がいるので、昼前には帰り食事の支度をすることで、遠くには行かない。

さて、この暑い中での労働は、収穫物を得るためには、どうしてもしなくてはならない。どのような時代や社会になっても、・・・。「縮小社会」では、化石燃料の枯渇がより明瞭になってくると、この労働は、より一層激しくなるであろう。

午前11時、午前の仕事を終える。さて、ここから、現代の石油文明の恩恵を受ける。温かいシャワーを浴びて汗を流す。冷蔵庫から冷たい飲み物を取り出し、クーラーの下で扇風機の前で寝転ぶ。これは、素晴らしい文明であろう。蛇口をひねるとお湯が出て、冷蔵庫の中には冷たい飲み物があるなんて、なんて快適な事であろうか。

このようなことは、やがては困難なことになることが予想される。便利さ、快適さばかり追求している工業文明も、この先は見えているが、・・・。

それから、私は普段は横になり漫画をめくっていると、いつのまにか寝ている。それが、何故か、今日は、トルストイの民話を読みだした。このようなものを読むと、寝つかれないことになった。寝て体力を回復しなくてはならないのに・・・。

この後、何日もかけて、繰り返し何回も、トルストイの「人は、何によって生きているか」を読み返すことをした。ううん、・・・。夢にまで出てきそうだ。